# ぼくの泥棒日記

東海道親子三人珍道中

宗田 理（おさむ）

# ぼくの泥棒日記

## —東海道親子三人珍道中—

新潮文庫　　そ－2－1

昭和六十三年六月二十五日　発行
昭和六十三年九月五日　二刷

著者　宗田理
発行者　佐藤亮
発行所　株式会社新潮社

郵便番号
東京都新宿区矢
電話　業務部(〇三)二六六一
　　編集部(〇三)二六六一
振替東京四－八

定価はカバーに表示してあり

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

新潮文庫

# ぼくの泥棒日記

## 東海道親子三人珍道中

宗田　理 著

新潮社版

4067

# 目次

第一章　歓迎、泥棒さま……七
第二章　大井川の戦い……五九
第三章　現金輸送車襲撃犯を狙え……一一〇
第四章　桑名のニセピカソ……一六七
第五章　草津の敵討ち……二二一
第六章　三条大橋〝上がり〟……二七四

解説　宗肖之介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

# ぼくの泥棒日記

東海道親子三人珍道中

# 第一章　歓迎、泥棒さま

## 1

国道一号線。横浜市内の渋滞を脱けて、車は戸塚に入っていた。
「父さん」
五郎は運転する新五の肩越しに声をかけた。返事がなかったので、もう一度「父さん」と声をかけた。
「黙っておいで」
助手席の母親ルリ子が、振り返って、怖い目で五郎をにらんだ。
「あれが見えないのかい」
ルリ子は左側を指さした。戸塚警察署。
これでは、父親の新五が緊張しているのも無理はない。五郎はじっと我慢した。
戸塚警察署を通り過ぎてしばらくしてから、
「なんだ？」

と新五が聞いた。
「きょう、なんの日か知ってる？」
「五月十日、火曜日。それがどうした？」
「チェッ、そこまで言ってもわかんないのか。ぼくの誕生日じゃないか」
「そうか、そうだった。五月十日は五十の日、お前が生れた日、こいつは大物になるぞと喜んだものだった。いくつになる？」
「十三歳だよ。子供の年くらい覚えときなよ」
「十三歳か。するとあと一年だな」
「ちがうよ、あと三年だよ。といっても学校へ行ってないんだから、いつ卒業できるかわかんないけど」
五郎はことしから中学へ入学することになっているのだが、まだ学校へ顔を出したことがない。
「あと一年ということはだな、十四歳になると、お前のやることが刑法に触れるということだ」
「じゃあ、一年間は何をやっても大丈夫なの？」
「そうだ。おれは刑務所の中で六法全書を何度も読んだから知ってるんだ」
五郎の父親新五は泥棒で前科二犯である。泥棒といってもコソ泥だからいずれも刑期は短かった。

しかしそれは独身のときで、結婚してからは一度も捕まったことはない。これは泥棒から足を洗ったからでなく、妻のルリ子とのチームワークがいいからである。

「もう結婚して十四年になるのね」

ルリ子がしみじみと言った。

「十五年だと死刑は時効だ」

新五は、すぐ法律の知識をひけらかす。

「二人が結婚したときのことおしえてよ」

「まだ、お前に話したことなかったかな？」

「ないよ」

「そうか。じゃあ話そうか」

前方に目を向けたまま言った。新五はつねに安全運転である。違反で捕まったことは一度もない。

泥棒というものは、こういうチンケなことで法律を犯してはならない。

それが鉄則だということをいつも言うので、五郎も自然に覚えてしまった。

「あのとき、おれは二十六歳。お前はいくつだった？」

「二十四歳よ」

「母さん、その頃きれいだった？」

「当り前よ。いまだっていい女だが、その頃は花もはじらうって年だったからな、おれは一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目で惚れちまった」
「母さん何してたの？」
「バーに勤めてたんだが、それは表て向きで、実は結婚詐欺師だったんだ」
「へえ、結婚詐欺ってどうやるの？」
「まあ、網を張って待ってる蜘蛛みたいなもんだな。男に惚れさせて、結婚の申し込みをさせる。それから結婚の仕度にお金が要ると言って、吸い上げるだけ吸い上げる。そしてハイサヨナラさ」
「それ、女でなくちゃできないね？」
「男でもできるさ。しかし、どっちにしても顔がよくなくちゃだめだな」
「父さんじゃ無理だね」
新五は顔が大きく平べったい。凸凹が少ないのだ。目も小さいし、その上に短い眉毛がちょこんと乗っている。背も低い。
「おれは喋りなら自信があるが顔はどうもな。そのおれに母さんはうまいこと言ったからつい乗せられちまったのさ」
「うまいことって何？」
「あなたって頭が切れて、男らしいとか。いろいろだ」
「母さん、どうしてそんな見えすいたこと言ったの？」
「お金持ってたからだよ」

「そのとき、ちょっとした稼ぎがあってな、懐が暖かかったんだ。その金を見せたとたん母さんの顔色が変った。そして結婚したいと言い出したんだ」
「それまで、大抵の男はひっかかったんだけど、父さんはプロだからね、見破られちゃったんだよ」
「それでどうした？」
「ほんとに結婚しちゃったのさ。だから五郎が生れたんじゃない」
「そういうことか」
「お前ももうじき女とつき合うようになる。そのとき、きれいな女がうまいこと言ったら気をつけるんだぞ」
「わかったよ。ぼくは母さん似だからよかった」
「五郎なら、女の子をひっかけられるよ」
ルリ子は、いつも父さんに似なくてよかったと言っている。ただ背だけは父親似で低い。
「女にもてる男ってのは、身をもちくずすもんだ。ヒモなんかになってな」
「それはほんとだよ。だから母さんは父さんみたいな男をえらんだのさ」
「後悔したことない？」
「ないね」
照れもせずはっきりと言う。新五は左手をルリ子の肩にまわした。ルリ子は頭を新五の肩に乗せた。

実際、五郎の両親は仲がいい。こんな光景はいつも見なれているので、別になんとも思わない。

「ねえ、ぼくの誕生日に何をプレゼントしてくれる？」

「よし、もうすぐ藤沢に入るからそれまで待て」

そうか、藤沢のどこかの店で買ってくれるのだな。そう考えると五郎はわくわくしてきた。

「何をプレゼントしてくれるの？」

「お前の好きなものだ」

「ええっ、なんでもいいの？」

新五があまり気前のいいことを言うので、五郎の方が慌てた。このところ稼ぎが少ないと二人でぼやいていたのに、どこにそんなお金があったのだろう。

何にしようかなと考えた。なんでもいいと言われると、一度にいろんなものが浮んできて、とても一つに決まらない。

ことしの三月の終りのことだった。もうあと三日で中学生になるのだ。

そんなことを漠然と考えながら、五郎はテレビのアニメを見ていた。そろそろ六時になるというのに、新五もルリ子も帰って来ない。腹も空いてきた。

そのとき、アパートのドアがいきなり開いて新五が顔を出した。

「五郎、ちょっと表てへ出て来い」

やけに興奮しているので、五郎はスニーカーをつっかけて外へ飛び出した。アパートの階段を二段ずつ飛び降りると、道路にワンボックスカーが停(とま)っており、そこにルリ子が立っていた。

「どうしたの？　この車」

「きょうからうちのものだよ。どうだい、いい車だろう」

「すげえなあ」

五郎はずっと前から車が欲しかった。それがとうとう手に入ったのだ。しかし、そばに寄ってよく見ると、あちこちが凹(へこ)んで、塗料も剝(は)げ、下の方に錆(さび)も出ている。

「これポンコツだね」

あとからやって来た新五に聞いた。

「ああ、十七万キロ走ってるがエンジンの調子はいい。車検はあと一カ月ある」

「拾って来たの？」

「まあ、それに近いようなもんだ。これなら買ったって一万円もしねえ」

「タイヤも丸ぼうずだね」

「そんなものは替えればいい」

新五はドアをあけた。うしろは引戸になっている。中もかなり汚れている。

「リアシートを取っぱらっちまって、ベッドと世帯道具を入れるんだ」

「冷蔵庫やテレビも……？」

「ああそうだ。そうしたら、いま住んでるところより立派な部屋になるぞ」
「ここが、これからぼくたちの家？」
「そうさ。動く家だ。海に行きたければ海に行けばいいし、山に行きたくなったら山へ行く、好きなところで住めるぞ」
新五の顔に夕陽があたって赤い。まるで夢でも見ているような顔だ。
「学校はどうするの？」
五郎はそれがちょっと心配になった。
「学校か、そんなものやめちまえばいい。勉強はおれが教えてやる」
「中学に行かなくてもいいの？」
「ああ、行かなくてもいい。中学ってとこはな、勉強の好きな奴には面白いところだが、嫌いな奴にとっちゃ地獄みてえなところだ。毎日無理矢理勉強させられて、やらなきゃぶんなぐられる。お前みたいなチビは、悪い連中にいじめられる。自殺するのも無理ねえ」
「だけど義務教育なんだろう？」
「何が義務教育だってんだ。お前はもう自由に字も書けるし計算もできる。それ以上勉強しろなんて、要らぬお節介ってもんだ」
新五が言うと、そういう気になってくるから不思議だ。それに五郎も中学なんてどうでもよかった。
小学校時代、五郎のあだなはゴエモンだった。名字が石川だったからだ。

その頃は、まだ父親と母親が泥棒であるということは知らなかったので、ゴエモンと言われるたびにいやな思いをしたものだった。

両親が泥棒であることを知ったのは、たしか五年生の夏だったと思う。それを聞かされたとき、ちっともショックを感じなかったのはなぜだろう。それがいまでも不思議である。

「おれがなぜ中学が嫌いかっていうとだな、あそこは余計なことばかり教えるからだ。そりゃあ、大学に入って将来サラリーマンにでもなろうという者にとっちゃ、中学は必要かもしれねえ。しかしお前がなるのは泥棒だ。もちろん泥棒だって勉強は必要だ。でもその勉強は中学では教えてくれねえ」

「当り前よ。そんなこと教えられたんじゃ、私たちの商売上ったりよ」

ルリ子が醒めた顔で言った。

「これからは、おれと母さんがお前に帝王学を教えてやる」

「帝王学って何？」

「泥棒の王様になる勉強だ。これは難しいぞ。東大に入るより難しいな」

「そんなに……？」

五郎はびびった。

「そりゃ、おれたちみてえにコソ泥になるならだれでもやれる。しかしおれは、お前に国を盗むような一流の大泥棒になってほしいんだ。それがおれの夢だ」

「国をどうやって盗むの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton